古代チベット史研究　下卷

佐藤　長　著

昭和三十四年十月　東洋史研究會發行　本文四三八頁　索引八十二頁　英文要旨三十四頁

古代チベット史研究の上卷が昭和三三年九月に上梓せられて以來、下卷の完結せられんことを待ちわびて來たが、昨三四年一〇月、それを手にすることができた。チベット學に志す者にとつて欣快の至りである。さきに上卷に對する批判紹介を試みた因緣によつて、不肖わたくしが再び拙い筆をとることになつた。

上卷に引續いて、各論第五より最後の第七までの論述は、中國及びチベットにおける多くの史料を縱横無盡に驅使してなれるもので、そこは著者の獨壇場である。何びとの追隨をも許さないといつて過言ではあるまい。

先ず、各論第五の最初に、チソンデツェンの卽位に關する中國史料の混亂を見事に解決せられている。今までチソンデツェン王は、金城公主の子であると一般に信ぜられ、從來のチベットに關する文獻には皆そのように書かれている。これはプトン史の誤れる記載に由來するものである。實際はチベットの有力氏族ナナム家出身の妃の子であることがいま明らかとなつた。この王が公主の子であるならば、母の故國である唐の首都を攻略したり、また中國佛敎を嫌つてインド佛敎を採用したなどいうことは、常識からいつて、どうも首肯し難いことであつたが、これですべて明白となつた。

さて、各論第五の中心課題は、吐蕃の長安侵入である。異民族による長安の占領は、唐一代を通じて吐蕃だけであり、一方チベット側からすれば、これがチベット史を通じて最も誇るべき勝利として傳えられている。佐藤氏のこの上下二卷の研究においても、これが全體の頂點の如き觀を呈するのは當然のことである。この下卷が、この論題を以て始まつていることは、われわれに最も興味をそそるものである。といつて、上卷を措いて下卷から讀み始めることは適切ではない。何となれば、この長安侵入の大擧の成功は、直接には安史の亂による唐國內の混亂であるが、その遠因は、上卷末の各論第四に述べられているように、吐蕃が金城公主の化粧料として河西九曲の地を入手し、それを據點としておつたことまで溯るのであつて、そのことが見逃されてはならない。各論第四と第五の間で上下二卷が分けられているが、それは頁數の都合によるのであるから、讀者は一連の關連性を以て繙くべきである。その點を著者は意圖して書いていられるように思う。

吐蕃が長安に近づいたときにも殆んど抵抗をうけずに容易に侵入しえた理由として、唐朝內部の宦官程元振の專横が擧げられている（本書五六二頁）。それと同時にわれわれは、舊唐書卷一一八王縉傳に「代宗……每西蕃入寇、必令群僧講誦仁王經、以禳虜寇。」という記載を注意すべきであろう。皇帝自らも佛敎信仰に凝り祈禱のみに賴つて、適切な對吐蕃防禦策を考えなかつた。そのように何ら無策であつたから、通鑑にいう「郭子儀數上言、吐蕃黨項不可忽、宜早爲之備。」（本書五二八頁に引用）ということになつたのであろう。

次に各論第六では、建中會盟（淸水の會盟）への過程が述べられ

ている。この會盟の前後の時代は、打ち續く戰爭のためか中國史料に不明確な點が多く、王統とその年代論の上でチベット史を通じて最大の難關であつた。ヨーロッパの諸學者の成果も所說に各々差異があり、その究明には煩雜極まりないものがあつた。ところが著者は、中國とチベットとの史料は勿論、新出の敦煌史料を遺憾なく利用し盡し、ここに快刀亂麻を斷つが如く、年代論の決定的な結論を得られた。

さて建中會盟が行われて、長年の唐蕃の戰いは一先ず終ることになる。その會盟成立の背景について、特に從來全くわからなかつた吐蕃宮廷內部の鬪爭が、明白になされ得たことは、見事な成果といわねばならない。そして特に佛教史を志す者にとつて注意せしめられることは、この會盟のとき、吐蕃側が佛幄中で香を焚いて誓をなしたことである（本書六一〇頁）。この時の王であるチソンデツェン以前のチベットにおいて、佛教は充分滲透していたとはいえないであろう。しかも第二詔勅によれば、この王の統治の初期には宮廷が反佛派で占められ、王が二十才になつて災を蒙つてから佛教が再び信仰せられたという（本書七七五―六頁）。王の生誕は七四二年との決定を見たから、七六一年から佛教受容が再び始まつたことになる。それから二十二年後の七八三年にこの會盟が行われ、盟誓の儀式としては異例な方法――それは吐蕃側だけが勝手に行つたのではあるが――が採られた。およそ國家的儀式というものは、つねに古來からのしきたりが固く遵守せられるのであり、從つて外來宗教的なものがそこに採用されるのは容易からぬことであるが、いまはまさしくそれが行われた。それは、約二十年程の間に、チベットへ本格的な佛教受容が行われることになり、急速に佛教思想が滲透していつたことを如實に物語るものではなかろうか。

次に各論第七長慶會盟前後の論述がなされて各論を終る。先ず、平涼の僞盟について、名君と謳われるチソンデツェン王が史上稀に見る背德行爲を敢えてしたということは、誰しも考え及ばないところである。上卷に登場したガル一家の專横の例もあり、恐らくこの僞盟は宰相シャンギェルツェン（尚結贊）が勝手に仕組んだ奸計であつて、王自らの計畫ではなかつたと想像できる。それにしても一般に、背德行爲はやがて非常な損失を招くものであるにもかかわらず、それを敢行したのは何故であろうか。それに對して著者は、シャンギェルツェンの活動という項の下に詳述せられ、ギェルツェンの智謀というか奸智というか、それを明白に浮き彫りせられた。

そこで唐側としては、これに對し李泌の對吐蕃政策が打ち建てられ、それの實行にとりかかつた。そして、やがて唐は、ウイグルと南詔とを吐蕃側より抱き込むことに成功したのであるが、その過程を著者はよくまとめている。吐蕃のもとにあつたそれら諸民族の苦しみと吐蕃の內情は、兩唐書の吐蕃傳に却つて記されていず、新唐書南蠻傳上に見える四忍四難の奏文によつて知ることができる。また、南詔の唐への內附として默蒼山の盟も出ているから、南蠻傳を參照してここを讀まれるならば、よくわかるであろう。

最後に、長慶の會盟が成立し有名な碑が立てられる記述となるが、會盟成立の要因が、李泌の積極的包圍政策の成功であることを强調せられているのは、極めて適切である。ところが反面からいえば、かくも唐の外交が成功し、唐の邊境守備が强固となつたのであるから、平涼の僞盟の如き背德行爲を敢えてするような吐蕃よりの請和を許す必要がないではないかという疑問が生れる。これにつ

いて、宦官の專横が著しく、鋭意改革を行いつつあつた憲宗が遂に弑せられるに至り、新らたに即位した穆宗が武備を緩めることを希望したという唐朝内部の政策の變換もあつたのではなかろうか。とにかく、急速に會盟の運びとなり、これをポイントとして唐蕃間の長い抗爭は終止符を打つことになつた。これを以て各論を終るのである。

さて次に、古代全體をまとめて論述した總論に入る。

先ず政治組織について、チベット王の性格より述べられている。これは、イタリアの中亞極東研究所の機關誌 "East and West" (Vl. No. 3) に掲載せられたトゥッチ教授の The Sacral Character of the Kings of Ancient Tibet なる論文にヒントを得、それが有史以前ボンポ教思想のもとに成立した王の性格を述べてあるのに對して、佐藤氏は有史時代に入つて佛教による影響など更に一歩を進められた。トゥッチ教授の論文は「古代チベット王の神祕的性格」(古代學第五卷三・四號所收) として和譯されているから參照せられるとよりよいであろう。

次に、生活形態に關しては從來の常識的な紹介を越えて有益な論述である。

その次の軍事組織については、ペマタンイグによる表示をなし、それが司令官の名からチソンデツェン王時代の組織であると結論せられた。われわれは軍制に關する明白な史料を得たことを喜ぶ。

次に、文化狀態について、インドと中國との聯關の二つの論述が與えられている。著者がこの二つを草されるとき、トゥッチ教授の Minor Buddhist Texts. II. Roma, 1958. の中に收められている The debate of bSam yas according to Tibetan sources. なる一五〇頁に亘る大論文を參照していられないということは遺憾なことであつた。この書の題名が佛教書としてのものであるから、うつかり見落されたものであろう。

インド文化との聯關の記述の中に、サムイェ寺建立の年次について、羊の年を七九一年と考えるトゥッチ教授の說をあげ (本書七六八頁)、それに對して論駁して七七九年とするのが妥當であるという。ところが、トゥッチ教授も前述書二八頁に先の七九一年說を取り消して、新たに多くのチベット文獻を驅使して研究せられ、結局七七九年として佐藤氏の說と期せずして一致したのは面白い。しかし、その論證は異つている。トゥッチ教授は「羊の年は七六七年か七七九年か七九一年かの何れかである。もしその法論が七九二年におこつたと認めるならば、新しい寺の組織化とか、シャーンタラクシタの死とか、インド僧と中國僧との間に增大せる敵對心とか、カマラシーラの招請とかいつた非常に澤山のことがらが、たつた一年ぐらいの間におこるなどということは不可能と思われるので、われわれは七九一年ということを却下しなければならない。七六七年は餘りにも早や過ぎるので結局われわれはサムイェ寺の建立 (七七五) という尤もな日付と一致している七七九年を一番適當な年として認めねばならない。」という。一方、佐藤氏は、羊の年に礎石を置いたという第一詔勅の末文に、誓約した官僚の名が出ているが、その中にシャンギェルシグシュテンの名を指摘し、彼の宰相在職年次から七七九年であると結論した (本書七六八—九頁)。佐藤氏の論證の方が史的明確さを有しているといわねばならない。ところが、兩氏の說が一致することによつて問題が解決したわけではない。というのは、トゥッチ教授の上記の論證の目的は、サムイェ

寺の建立の年次を決定するためではなくて、七人のチベット人が試みに出家した年であるというにある。佐藤氏は、プトン史に七人の出家の年は羊の年（本書七六七頁）とあるから、サムイェ寺定礎の年と同じであろうとしている。そして、プトン史の丁卯（七七五）定礎説を採らない。一方、トゥッチ教授は、サムイェ寺建立の年について前述書、二八―三一頁に、多くのチベット史料を驅使して論究し、最後に「かくてサムイェ寺建立の年として七七五年が非常に有力であると私は考えたくなるのである。そして試みの出家は四年後の七七九年に僧に任命せられ、法論はドミエヴィル教授の指示した七九二年と七九四年との間におこつたと考えるようになるのである。」と結論している。常識からいえば、七七五年に定礎、七七九年に出家というトゥッチ教授の説の方が尤もらしい。定礎と出家とが同年というのは聊か偶然過ぎる一致の如く思われる。しかし佐藤氏の七七九年定礎という根據は、第一詔勅という同時代的な有力史料によつている。それに反してトゥッチ教授の扱われた史料は大體チョエジュン類であるから、佐藤氏の説の方に信頼性があるといわねばならない。むしろ、出家の年に關する同時代的史料が無いのであつて、そこに疑問が殘るのではなからうか。ちなみに、トゥッチ教授は、チベット諸史料の校合によつて七人の出家というのは實際は六人ではなかつたろうかと力説していられるのは一讀すべき論説である。

次にデンカルマ目錄の編纂年次について、著者は、プトン史にいう龍の年を簡明に七八八年と推定した。芳村修基氏は、デンカルマ目錄に收められている漢譯廻向輪經のチベット重譯をなした Rnam par mi rtog pa を、南撥特計波と同一人と見做すならば、南撥が唐へ來朝してから以後に重譯したのであろうから、同目錄の編纂を八〇〇年より前におくことはできないとする（Yoshimura: The Denkar-ma, Ryukoku, 1950. p.13）。ところが佐藤氏は同一人と見做さず（本書六八六頁）、南撥特計波に對する還元を別に考えていられるようである。ちなみに、その還元についてのヨーロッパの學者の説は、トゥッチ教授の前述書五四頁を參照せられたい。

次に、中國文化との聯關において、有名な法論がとりあげられている。この法論については既にドミエヴィル教授が Le concile de Lhasa, I. Paris, 1952. なる成果を公にしていることは周知の通りである。先ず法論の年に關しては、佐藤氏もトゥッチ教授も共にドミエヴィル教授の七九二―七九四年説を妥當と見做している。そして佐藤氏の論述は、頓悟大乘正理決の記述が、王統記・サムイェの鐘銘・タルグの鐘銘などの同時代的史料と一致していることを指摘するのに重點が指向されている。一方、トゥッチ教授の前述書における大きな發見は、その法論がラサで行われたのではなくサムイェ寺で行われたという點である。したがつて、この法論を "The Council of bSam yas" と呼ばねばならぬという（前述書二六・三二頁など）。なるほど當時の中心地はラサではなく、それよりはるか南のヤルルン乃至ラグマル地方である。チベットといえば、直ちにラサを連想する現代のわれわれの考えが先入觀となつて、ドミエヴィル教授の著書の表題となつたと思われる。教授の如き大家にして爾り、われわれの如きは深く戒めとせねばならない。それにしても佐藤氏は、一言もラサで行われたというような意味を書いていられないのは、さすがである。恐らく多少疑問に思つて注意して觸れられなかつたのであろう。

總論第二として王統表並に宰相表を、第三として年表を發表せら

れた。これらの表は、本書上下二卷の究明の結晶ともいうべきものである。このような表が作られることをわれわれはどれほど待望したであろうか。今や出來るべきものが出來上ったという思いがする。

附錄第一として、プトン史のチベット古代の部分の和譯が附けられた。本書の各論總論において、このプトン史の記述が最もよく引證せられている。しかし、附錄にまとめられたのを一見すると、先に引用せられた和譯と文章が違っている。それは意識的に文體を變えられた以外に、更に念を入れて譯を訂正せられたからであろう。そのことに關連して一例をとって述べると、附錄の和譯（八四九頁）に、「トンミアヌゥの子に十六人の仲間を附し、文字を學ぶために遣したり。」とあるが、上卷（九〇頁）には文字ではなく「文法」と譯せられている。この原語は sgra であるが、オバミラー氏は解釋に迷ったのか省略して譯語を出していない。一般に、文字と文法とは相當意味を異にするが、何れが正しい譯語であるか。それについてテプゴン（ka, 20a；Roerich 英譯三九頁）には、「文字とことば yi ge daṅ skad をよく學んだ」とあり、文法のことに關しては何も記さない。また王統鏡（29 b）にも「文字 yi ge を學ぶために遣わされた。」とある。それでは、テプゴンは文法に關する事實を認めなかったのであろうかというとそうではない。他の個所（ña 7b；Roerich 英譯二一八頁）に、何を學んだかということを省略して示していないが、文法 sgra の記述は明記せられている。また王統鏡も少し後に（31 a）、「ラリクセンゲに一切の文法論書を學んで」とある。王統鏡は、インドで學んだ師をリージンとラリクセンゲとの二人とするからプトン史と少し趣を異にするので論外としても、テプゴンはプトン史と同じくラリクセンゲ一人だけを師となすからプトン史と對照してよいであろう。そうすると、テプゴンは文字とことばとを學んだことを明記し、文法に關しては他の個所で示しているから、佐藤氏が先に文法と譯し、後に文字と訂正されたのは何れも聊か充分ではないと思う。わたくしはこの sgra の意味を文字乃至文法を含んだものに理解し、廣く「ことば」或は「言語」を學んだと見做してはどうかと考えるのである。

その他、このプトン史の和譯の中の佛教用語について私なりの考えもあるが、長くなるから割愛して他の機會に讓ることにする。しかし、何といっても、あらゆる史料の裏づけを以て讀まれた和譯だけに名譯といわなくてはならない。少くとも歷史的事實より見て誤譯という個所は存在しない。その點、信頼してよい譯である。

次に、附錄第二として唐蕃會盟碑の研究が載せられている。この碑に對する研究は、世界の多くの學者によってなされてきた。著者は、これらの研究成果の歷史ともいうべき記述を施されている。そして碑文及び和譯を横組みで載せられ、それに對する詳細な註が附けられている。一見して明瞭な如く、あらゆる學者の成果を參照して綿密精確に研究せられている。現段階では、これ以上に出られない最高の成果といってよい。

後に、八二頁に亘る索引が附けられた。何ぶんにも、九三五頁に及ぶ大著であるから、索引がなくては困る場合が多いが、大へん便利となった。

最後に、ロイ・ミラー氏によって飜譯された三四頁の英文摘要が收錄せられている。本書全部が英譯せられて、世界の學界に貢獻することを切望するのであるが、取り敢えず摘要でも掲載せられたことは喜ばしい。ミラー氏の並々ならぬ盡力に對して敬意を表したい。

いまここに、本書上下二卷の大著が完結して、わが國のチベット史學研究部門が一躍世界の水準を超えたのは、何といっても喜ばしい限りである。末筆ながら、心からの祝意を表したいと思う。

〔稻葉正就〕